
Chain

進道 悠輝

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C h a i n

【Nコード】

N 3 8 7 8 A

【作者名】

進道 悠輝

【あらすじ】

人と人は、固い鎖で繋がっている。それは 絆を、人間関係を表す象徴。

act 0・繋がる鎖「Relation」(前書き)

シンドウユウキ
進道悠輝といいます。よろしくお願いします。

この作品は、人間関係の深さと、その儚さを伝えようと書いたものです。

その辺りが、皆さんに伝われば嬉しい限りです。

どうか、よろしくお願いします。

act 0・繋がる鎖「Relation」

運命は

常に巡ってる。

僕らの周りで。

act 0・繋がる鎖「Relation」

知っているだろうか。

見えない鎖で、人は皆、繋がっている。

相手との関係が、親密になればなるほどに、右腕に繋がれた鎖は、頑丈なものに形を変える。

親密なほど色が濃くなり、白から灰色、そして黒へと色が変わってゆく。

だが、その鎖をることのできる人間が、稀に存在する。

その人間は、“鎖術師”と呼ばれる特殊な人間である。

そんな鎖術師として、彼女、御門時雨^{ミカドシグレ}は生まれた。

鎖を見ることのできる、選ばれた人間として生まれた者には、早くて10歳の誕生日、遅くても15歳の誕生日には“使い”が現れる。“使い”とは既に鎖術師となった人間が上官の命で、その人間のもとに就く。

その“使い”から、真実を告げられ、鎖術師となる。

鎖術師としての素質の点で優秀なほど早くに“使い”は現れる。

時雨の所へ使いが現れたのは、10歳の誕生日だった。

act 0・繋がる鎖「Relation」（後書き）

運命は

常に巡ってる。

僕らの周りで。

知っているだろうか。

見えない鎖で、人は皆、繋がっている。

相手との関係が、親密になればなるほどに、右腕に繋がれた鎖は、頑丈なものに形を変える。

親密なほど色が濃くなり、白から灰色、そして黒へと色が変わってゆく。

だが、その鎖を見ることができる人間が、稀に存在する。

その人間は、“鎖術師”と呼ばれる特殊な人間である。

そんな鎖術師として、彼女、御門時雨^{ミカトシグレ}は生まれた。

鎖を見ることのできる、選ばれた人間として生まれた者には、早くて10歳の誕生日、遅くても15歳の誕生日には“使い”が現れる。

“使い”とは既に鎖術師となった人間が上官の命で、その人間のもとに就く。

その“使い”から、真実を告げられ、鎖術師となる。

鎖術師としての素質の点で優秀なほど早くに“使い”は現れる。

時雨の所へ使いが現れたのは、10歳の誕生日だった。

act 1:十歳の誕生日「Starting」

物語は動き出す。

それは

運命だったのかもしれない。

時雨はその日、住み慣れた孤児院で誕生会を祝われていた。

5歳のとき、幼くして両親を事故で亡くした時雨は、近くの施設に預けられることになった。

それから既に五年。施設の先生や他の子供たちとは、とても頑丈な黒い鎖で繋がれていた。

決して切れることのない、固い絆。

それは結ばれた関係、つまり鎖の形がよく表していた。

漆黒の鎖は二、三重にまで重なって、結ばれている。

暗闇の中、小さなロウソクの灯を皆で楽しそうに囲んで、10歳になったことを祝ってもらった。

その日は時雨にとって、とても嬉しい日になった。

そんな日の夜の出来事だった。

その日は、時雨にとって、10歳になったことよりも、重要な記念日になった。

どこからともなく聞こえた男の声。

その言葉は今でも鮮明に時雨の記憶に残っていた。

彼の第一声は、確か。

「ハ―イ、時雨ちゃん。コンバンハ」

「だ……だれ？」

何も知らない時雨は、身体を震わせながら、得体の知れない謎の若

い青年の声に怯える。

「時雨ちゃんはある……」

男の声は一息置いて、時雨に訊ねた。

「”鎖”見えるよね」

「……知ってるの？この”鎖”のこと」

時雨は彼の言った鎖という言葉に反応し、訊ねるように言った。

「当然。僕も見えてるんだからさ」

時雨は昔、孤児院の友達に鎖のことを聞いたときに、他の人には見えないことを知った。

だが、耳に入ってくる声は、それを知っている上に、見えると言うのだ。

「……教えて」

「ハイ？」

聞き返すその声に対し、時雨は力強く言い放った。

「私に……この鎖のこと、教えて！」

その言葉に続くように、時雨は言う。

「昔から見えるのに、鎖はしっかりそこにあるのに、これが何なのか、全然わからないよ！！」

時雨の泣くような細かい声に、その声はゆっくり答える。

「そつスねえ……簡単に言うなら、この鎖は……」

関係。

「かん……けえ？」

「そつ、人間同士の関わりっス」

時雨は足の震えも忘れるほどに、その話に食い入っていた。

謎の声は、彼女に全てを話した。

それぞれの鎖の個々の違いは関係の強さによるもの。

その鎖を司る者が”鎖術師”であること。

そして、時雨にその素質があること。

「…さじゅつし？」

「そう。鎖を正しく導く者です」

「それに、私になるの？」

時雨は少し驚きながらもそう訊ねる。

「はい。充分に素質はあるはずです」

「それって…具体的には何をするの？」

「主には鎖…つまり、人と人の関係を断ち切ろうとする魔物を討伐すること」

重たい口調で言った声が、妙に時雨の心を締め付けた。

「それって…私とみんなの関係も？」

時雨が震えるように細かい声で、恐る恐る彼に訊ねた。

「ハイ…下手をすれば、そうなることもありえます」

その一言は、時雨を動かすきっかけとなった。

「私…やるよ。できるかはわからないけど、身近な人との関係ぐらいは守っていききたい！」

これが時雨の、鎖術師としての運命の始まりとなる、記念日となった。

感情は

自分を迷わせる。

御門時雨、16歳。

この年、高校に入学した。

季節は2月。人々が恋に燃える月でもあった。

2月14日のバレンタインデー。

これが主な原因だろう。

男子に関しては、チョコレートがもらえるだろうか。などと期待に胸を膨らませている。

さらに、今日は前日の13日なので、一際テンションが高い。

「時雨えー。時雨は、誰かにチョコあげるの？」

「んー。誰にも」

少し悩む振りをして、時雨は答えた。

実は全く悩んでなどいない。最初から、誰にもあげるつもりはなかったから。

「そっかあ。あげないんだあ」

「そういうリオはどうなの？」

彼女は時雨の友人、スオウリオ周防莉緒。

明るい性格で、人と話しているときの彼女は、とても楽しそうに笑っている。

「私は……」

そう言つて、莉緒は頬を赤く染めて、恥ずかしそうに俯く。

「バレバレ。誰かにあげるんでしょ？」

そう時雨に告げられた莉緒は、小さく頷いた。

（羨ましいなあ。私に恋してる余裕なんかないしなあ）

そうして、時雨は帰宅する。

昔住んでいた孤児院ではなく、今は近くのアパートで暮らしている。理由の一つは、孤児院の人に鎖術師に関しての秘密を漏らさないように。そしてもう一つは、おかしな同居人のせい。

「お帰りイ、時雨ちゃん」

時雨の帰宅を察すると、奥からは黒いニット帽を被った金髪の男が現れる。

長い髪を後ろで束ねた形の髪は、彼には妙に決まっている。

「ハア……ただいま、 그레이」

그레이と呼ばれた男はニヤニヤと笑いながら、一言。

「そんなしかめっ面ばかりじゃあ、可愛いお顔が台無しですよ？」

この彼女の隣で笑うは、彼女にもとに就いた使い。

その名をアール・ 그레이という。

彼こそが、時雨の十歳の誕生日に、声をかけた張本人である。

「ほら、こおんなに可愛いのに」

近寄って、抱きしめようとした 그레이を時雨は一蹴。

「黙れ、ケダモノ！！」

「ケダモノ……」

그레이は、その場でガクリとうなだれる。その彼を哀れむ様子もなく、時雨は帰りに買ってきたコンビニ弁当を無言で食べ始める。 그레이とは視線を逸らすように、彼に背を向けて食事をとっている。

「ヒドいなあ」

「自業自得！」

時雨は鮭弁当を半分残し、

「ハイ」

と言って 그레이に差し出す。食べるということだろう。

そのことが 그레이にとって、とても嬉しかった。

（この箸！まさか、関節キス！）

グレイは差し出された弁当の上に乗せられた、使用済みの箸を見て、思わずにやけてしまう。

「いただきます!!」

そして、その箸を手に取り、口に含む。

「フフ…」

「何笑ってるの？変なの……」

グレイは頬を染めて、満面の笑みを浮かべていた。

「そういえば、仕事は？」

時雨はそんなグレイは放っておくと決め、一言訊ねる。

「ン？明日の午後二時ごろに魔物：鎖牙^{サーガ}が来ます。ポイントは…」
そう言つて、グレイは不適な笑みを浮かべた。

「時雨の通ってる、清涼^{せいりやう}高校です」

！？

「誰……！？誰が標的なの…」

「そんなの、わかりません」

時雨は不安そうな面もちでベッドに倒れ込んだ。

やはり、身近な人が狙われるということに不安を抱いているのだろうか。

「ハア……明日の二時つて、授業中じゃん。確か…科目は体育」

時雨は気持ちを落ち着かせるためか、ゆっくり目を瞑る。まるで眠るように。

「そんなに心配しなくても、僕が見張つとくから大丈夫」

グレイが時雨とは対照的な、明るい声で囁いた。

「あんたはイマイチ信用できないし」

「心外ですねえ。それでも信用できる人間なんですよ」

呆れ顔で言い捨てる時雨に、グレイは苦笑しながらつぶやいた。

「それに、相手は下級鎖牙です。あなたの實力なら、心配するほどのものじゃありません」

「そう、かな？」

時雨の顔色が少しだけ明るくなった。グレイの励ましは少なからず効果があるように見える。

「ハイ。もちろん」

「フフ……少しは気が楽になったかな。ありがとう」

「いえいえ」

そうして彼は、微笑む少女を楽しそうに見つめていた。

act 3・黒い空「Darkness Sky」

沈みかけた

太陽。

翌日、予告通りに二時、つまり五限目の授業まではこれといっておかしいことはなかった。

（さあて……ここからが本番ね）

時雨は目を凝らしながら周りをキョロキョロと見回す。

「どおしたの、時雨？」

「えっ？」

突然、顔をのぞき込むように見てきた彼女は莉緒だった。

「あっ、莉緒……」

「スッゴい怖い顔してたよ……」

時雨は少し頬を赤らめ、恥ずかしそうに言った。

「ホント？」

「大丈夫。時雨可愛いから、そのくらいじゃ変な顔にならないよ！
！」

「もう、からかわないでよっ」

莉緒はそんな時雨の様子を見て、楽しそうに笑っている。

（莉緒……か。狙われないでね）「さあて、着替えだあ」

「着替え？」

莉緒の言葉に時雨が聞き返すと、彼女はキョトンとした顔で囁く。

「体育でしょ？」

「あっ、そっか」

そうして、2人は他の女子と共に、離れにある更衣室に向かった。

「前から思ってたんだけど、このジャージダサイよね」

「どこもそんなもんじゃない？」

時雨は周りのみんなが着用している、暗い赤一色の体操着を見てつぶやく。

「今日マラソンだってさ」

「……マジッ？」

そう言っと、その女子は不機嫌そうな顔をして、ため息をつきながら更衣室を出ていった。

それに続くように、数人の女子が部屋を出ていく。

時雨もそれに混ざって駆けていった。

「はぁ……ま、だ？」

莉緒は息が荒い。

先ほどから校庭を走らされて、かれこれ15分はたつたろうか。

「ガンバッ！」

時雨は莉緒の姿を見つけ、声をかける。

「う……ん……」

とは言っても、時雨は真剣にマラソンをしているほど余裕はなかった。

常に周りを警戒しながら、走り回る。

グレイが監視しているとはいえ、不安なのは事実だった。

時計に目をやる。

時間はまさに二時から二分前。

（来る……！）

空に歪みが現れた。

裂けるように、空に縦のラインが入る。

その直線からは、紫色の鈍く、かつ重い輝きが放たれる。

（何……、一体じゃないの！？）

開かれた空の裂け目からは、ゆっくりと降下してくる2つの影が見えた。

「先生、少し気分が……」

「そうか、少し休んでろ」

「はい」

時雨は体育の担当教師に告げると、隙を見て、裂け目の方向へ向かった。

「ハ―イ、時雨ちゃん？」

「グレイ……！ あいつら二体なの！？」

呑気に駆け寄ってくるグレイに、時雨は焦りを見せる面もちで訊ねる。

「ハイ。というか 下級鎖牙が一体。最上級鎖牙一体。です」

「最上級……？」

そんな会話の最中、ちょうど裂け目の辺りへ着いた頃。

「おや、お出ましですかねえ？」

黒いバンダナを頭に巻いた少年が、睨むような目で二人を見ていた。

act 4・墮天使「Angel or Devil」

闇に堕ちた

天使。

「誰……？」

「誰、か……あんたこそ誰だよ？」

少年は苛立ったような口調で、吐き捨てるように言った。隣に座り込む、狼のような魔物は牙を見せて唸っている。しかし、思ったよりも小さく、子犬程度の大きさである。

「コイツ、腹減ってんだよなあ……」

「だから……なんですかね？」

グレイは、威圧感を持った力強い口調で聞き返す。

グレイは右腕に、左手を支えるように重ねる。辺りの空气中に目に見えるほどの大きな閃光が蠢き、一点、グレイの右腕に集まる。刃を形成するかのように、光は形を変えた。

「知ってます？ 僕も鎖術師なんすよ」

「ハハ。その程度の鎖術じゃあ……ざっと階級は、クラスDってとこか？」

少年は笑いながら、グレイの右腕を見てつぶやく。

「甘く見られたもんスねえ……これでもクラスBっすよ」

紅い光で造られた剣を突き立て、グレイは軽快な足取りでフットワークを踏む。

次の瞬間、凄まじいスピードで少年の後ろへまで移動した。

「ふうん。なかなかだね。でも」

まだまだ。

「うおつと！」

グレイは少年が腕を一振りしただけで、払い落とされた。

「何っ！？」

「それより……僕はその女に興味があるんだ」

少年は顔色一つ変えずに、圧倒的な力を見せつけて言った。

「僕らの仲間にならない？」

「ハア？ 私はね…他人の関係を壊すあんた達がだいっきらいなの！」

時雨は、少年を睨んで言い放った。

「そうか、残念だなあ。行け……ルーガス」

少年は隣の小さな狼に手から放たれる、黒い光を浴びせる。

見る見るうちに、ルーガスと呼ばれた狼は身体を変化させ、巨大な猛獣に姿を変えた。

「”鎖迅龍槍”（サジンリュウソウ）！！」

時雨の左腕から、青白く輝く鎖が伸びる。

その鎖は一本の槍のように、鋭く形を変えた。

「さあ、行くよ」時雨が槍を振り回し、ルーガスの腹部を一突きする。

先端の刃を引き抜くと、右足で蹴りを入れ、叩きつける。

「なかなかやるねえ……さすがSクラスだな」

「へえ……結構、調べてきてるのね」

時雨は不適に笑みを浮かべながら、浮遊する少年に槍を突き立てる。

「おや？ その君……まだ、生きてんだ」

少年は地に伏せるグレイがゆっくり動き出したのを確認し、つぶやく。

「グレイ……！！」

（まあ、いいや。楽しみは後にとっておこう……）
細い紫色の閃光は鎖のように形どられ、ゆっくりとグレイに絡み付く。

……”
シシヨクアンサ
紫色闇鎖”……！

act 5・別れの宣告「Gray Rain」

色褪せた

瞳のように。

あれから、謎の少年は去っていった。

妙に引き際がよかったことがイマイチ不思議だったが。

その日はよく寝付けなかったのだが、深夜二時ごろにはパタリと寝付いてしまったようだ。

次の日の朝は、寝た時間が時間だけに、起きるのは遅かった。

「む……ん、何……これ？」

眠たい目を擦りながら、時雨は机の上に見える、見覚えのない紙を手取る。

サヨナラ。

グレイより

「何……？」

時雨は、机に手を叩きつけ、俯いた。

「どうして……っ！」

そして、叫んだ。

この日は休日のため、学校はなかった。

やることもない時雨は、街中を歩くことにした。

”何か”を、探すように。

グレイを、探すように。金髪の人物が前を通る度に、チラッと目を移してしまう。

「違うのか……」

そのとき、路地裏に向かう、見覚えのある帽子を被った金色で長髪
の青年を見かけた。

（あの帽子、それに身長や体つき……グレイ！？）

時雨は、彼を後ろから追ってみることにした。

グレイらしき人物は路地裏から紫色の光に包まれ、消えていった。
時雨もその後にくよくように、光に飛び込んでいった。

その先に見えたのは、あの少年だった。

「あんた……僕の身体に、何した？」

やはり、そこにいたのはグレイだった。

「紫色闇鎖のこと？」

「多分……それ」

グレイは苦しそうな顔を浮かべ、少年に問いかけていた。

「紫色闇鎖は相手の脳に直接呼びかけることができる鎖術。そして、
それを受けた者は……死ぬ」

「じゅーぶん、わかってる。僕の未来が死んで……そして、今
できる……最後の使命もね」

グレイはヘツと笑いながら、得意気に言い放った。

「ほう……」

act FINAL・未来へ「Evolution」

刻まれた

残酷な運命。

「最後の使命……鎖牙を……いや、鎖術界をなくすことが……僕の使命」

「鎖術界そのものを消す……？」

少年はフツと吐き捨て、バカにするように笑い出す。

「ハハハッ！！ 鎖術をなくしたりしたら、人間の絆は……鎖牙たちのやり放題だ！！」

「ああ、それがどうした？」

「は？」

グレイのあっさりとした返事に、聞き返してしまう。

「鎖牙に鎖……つまり絆が碎かれる。だから何だ？」

「……何だと？」

「碎かれた鎖を……再び繋ぎあわせることが、人間にはできるんだ！！」

グレイはそう言って、円を描く。これは鎖術陣と呼ばれる、上級以上の鎖術を使うために用いられるものだ。

「馬鹿馬鹿しい！そんな綺麗事っ！」

※”永劫封鎖”（エターナル・チェインズ）！！

その空間一帯を青い光が覆い尽くす。

「こいつ……本気かつ!？」

「ぐああああっ!!!」

グレイの叫び声が、あたり一帯に響き渡っていた。

光が収まったころ、周りを見渡しても、グレイの姿はなかった。

そして、あの鎖牙の少年も。

気づけば、鎖が見えなくなっていた。

「グレイ……が、鎖を消したんだ……」

グレイの最後に使った鎖術”永劫封鎖”が、私たちの世界にどんな影響をもたらすのかは、わからない。

けど、人間が変わるために、必要なことだったかもしれない。

人が、解かれた絆を再び固めるため。

人が、結ばれた絆を繋ぎ留めるため。

人が、強くなるため。

a c t F I N A L ・ 未来へ 「E v o l u t i o n」 (後書き)

読んでくださった皆さん、ありがとうございます。

この作品、展開等が唐突すぎな感じがありましたが、自分なりに伝えたいことは表現できたかと。

次回作を書く機会があれば、そちらもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3878a/>

Chain

2010年10月20日18時55分発行